- 1 主題名 「いい友達って…?」 中学年2-(3) 信頼・友情
- 2 資料名 「友達だから…」(出展:自作資料)
- 3 主題設定の理由

価値について

○ 本主題は、「友達と互いに理解し合い、信頼し合い、助け合う」ことを主 な内容としている。

私たちは、友人とのよりよい人間関係に恵まれることによって、日々の生活を快適に楽しくおくることができる。このよりよい人間関係とは、いわゆる友情と呼ばれるものである。

友情は、お互いの信頼関係を根底においた上で、互いに励まし合い、協力 し合い、またときには忠告し合うことにより育まれていく。その過程におい て友情を確かなものとして築き上げていくためには、友達の気持ちを推し量 り、常にその友達のことを思い、そして心を豊かに動かすことが大切である。

子どもの実態

○ 本学級の子どもたちは、友達の存在が自分の生活を楽しくすることは十分に理解できている。その友達というもののとらえ方であるが、アンケートからは、子どもたちがいい友達というものを「いっしょに遊んでくれる」「何かを貸してくれる」「困ったときに助けてくれる」といったように、相手の喜ぶことをしてあげられる人、といった視点からとらえていることがわかる。今、この子どもたちに必要なのは、そのような行為は友達を大切に思う心情が生み出しているということへの気づきではないだろうか。この気づきが、「相手のことを思えば、喜ぶことをしてあげることの他にも、忠告したりすることも友情の一つの形である」ということへの理解を生み出すものと考える。

めざす子どもの姿

<本主題を通して>

- 悩んでいる友達を見て「どんな言葉をかけてあげれば よいのだろう」という心が動く子ども。
- 友達のこと大切に思う気持ちから、様々な言葉や行動が生まれるということがわかる子ども。
- これまで気づかなかった、友達のことを大切に思っている自分や、自分のことを大切に思ってくれている友達の存在に気づくことのできる子ども。

<語り合いを通して>

- ◇ 他者の思いを受容,共感の立場から受け止めることので きる子ども。
- ◇ 心情テープやネームカードなどを活用し、自分の思いを 自分なりの言葉や動作で表現できる子ども。
- ◇ 自分の思いを、他者と語り合うことによって、強めたり 深めたり、また付加・修正したりすることができる子ども。◇ 自分の変容に自ら気づく子ども。

資料の内容

○ 本資料は、「目標の達成を目前にして、無念にもけがをしてしまった友人に対しどう接するか」という内容である。

高校2年生の達也は、目標にしてきた陸上の全国 大会の直前に足にけがをしてしまう。そんな達也に 対して、親友である主人公の「ぼく」は、「これま での努力を考えると走らせてあげたい」「でも、け がを考えると、無理はさせたくない」という二つの 気持ちの間で葛藤し、悩んでしまう。

語り合いについて

- 語り合いの内容, 方法, 形態
- 内容

大会前にけがをしてしまった友達に、「がんばれ」「むりをしないで…」のどちらの言葉をかけるか。

- 方法
 - ネームカードを貼って立場を明確にする。
 - ② 小集団で思いを交流し合い役割演技を行う。
- ・形態

椅子を二列のコの字形に配置(机は使用しない)

教師の関わりについて

- 語り合いの充実をめざし、教師は次のような関わりをもつ。
 - ・ネームカードを黒板に貼らせる際は、置く位置によって細かな心情が表されることを確認する。
 - ・小集団での交流を行う際は、ネームカードをもと に相手を決めるように言葉かけを行う。その際、 メンバー構成が適切か確認する。
- ・役割演技の際は、ねらいにせまる語り合いとなる ように、役割交代を行わせる。

4 本時のねらい

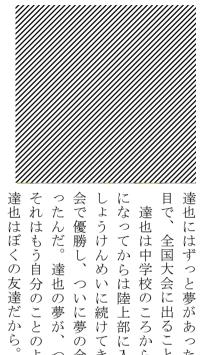
- 友達の立場や気持ちを推し量り、友達に温かな心で接しようとする心情を育てる。
- 5 準備
 - ・資料「友達だから…」 ・道徳ノート ・場面絵 ・操作物(心情色カード,心情テープ,ネームカード) ・視聴覚機器(パソコン,プロジェクター,スクリーン,CDレコーダー)
- 6 本時
- 平成20年10月20日(月) 4年1組教室にて

7 展開

	学 習 活 動	留意点	語 り 合 い の 進 め 方	
導入	 これまでの学習や活動を想起し、本時のめあてを確認する。 めあて 「いい友達」について考えよう。 2 資料「友達だから…」の前半部を視聴して、 	されるように、本時のキーワードとして「いい友達」という言葉を提示する。 また、めあてもキーワードを使って表現する。	 ※ 達也のことを思うが故に、「むりしないで…」「がんばれ」という二つの思いで葛藤している主人公「ぼく」の気持ちを、共感的に語り合わせていく。 発問1 全国大会の前の日、「ぼく」は達也に対してなんと声をかけたのでしょう。 	
	主人公の気持ちを中心に語り合い,「いい友達」について考えていく。	い場面を子どもにいくつか選択させ、その中から教師が場面を決定する。	① 黒板にネームカードを貼る。 <貼る位置による気持ちの違い>	
展開	(1) けがをおして陸上の大会に出ようとする達也に対する「ぼく」の気持ちについて語り合う。① 「ぼく」が達也にかけた言葉を考え、発表する。また、黒板にネームカードをはる。	○気持ちを「むりしないで…, がんばれ, どうしよう…」という三つに分け板書する。○自分の今の考え方が認識できるようまた, 他者の考え方を確認することもできるよう, 白のネームカードを黒板に貼らせ立場を明確にさせる。	青 紫 赤 a:絶対に止める よりしないで… まよう がんばれ b:迷うけれど止める c:止めたい気持ちが強い迷い d:どう言っていいかわからない e:応援する気持ちが強い迷い a b c は a b c e a c e に a c e に a e e に a e e e a e e e b e e e c e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e e <t< th=""></t<>	
前段	② 小集団を組み,自分が考えた「ぼく」の言葉と, そう考えた理由とを語り合う。③ 自分が選択した立場から役割演技を行う。※ 途中で役割交代を行う。	○多様な考え方の交流が可能となるよう、違う考え方の友達と語り合うというグループ構成の視点を提示する ○三つのどの立場も、達也のことを考えた気持ちから生まれていることに気づかせる。そのために、役割交代を行わせ双方の友達を大切に思う気持ちにふれさせる。	 ○ ネームカードをもとに、子ども達は違う考え方の子と小集団を組む。 例: a → f g や c d e と語り合う。 ② 小集団を組み語り合う。 とうしてやめさせようと考えたの? 	
	 (2) 資料の後半部を視聴して,「いい友達」とはどのような友達のことをいうのか語り合う。 ① 達也が「ぼく」に対して「ありがとう」と言って涙を流したときの気持ちについて語り合う。 ② 達也にとって「ぼく」はいい友達なのか考え発表する。 	とをおさえる。	心情テープを活用して気持 ちを表現する。 ③ 役割演技を行う。 ・最初は自分の選んだ立場から演技に参加する。	
展開後段	3 「いい友達」をキーワードにして,これまで の自分を振り返る。	○自分も大切に思われている存在であることに気づかせるため、友達に自分ができたことだけでなく、友達から親切にしてもらったことも想起させる。	むりしないで… まよう がんばれ ・途中で役割交代を行う。	
終末	4 教師の話を聞く。	○心のノートのP44を開かせ、内容が本時の学習と関連していることを知らせ、これからの生活の中で友達について思うとき、活用できるようにする。	※どちらも友達のことを大切に思っている ことに気がつく。 ○参観者も色カードを使い参加する。	

「友達だから…」

ぼくと達也は、 今高校二年生。 小学校のときからずっと友達で、 達也はぼくにとって大



達也に 目で、 全国大会に出ることだった。 った。それは、 \mathcal{O} 五千 m \mathcal{O}

それはもう自分のことのようにうれしかった。 会で優勝し、 になってからは陸上部に入り、 ったんだ。達也の夢が、ついにかなったんだ。ぼくは、 しょうけんめいに続けてきた。そして、この前の県の大 達也は中学校のころからずっと走るの ついに夢の全国大会に出場することが決ま 毎日毎日 が速く、 つらい だって、 練習を一 高

全国大会まであと二週間となったときに、 その事故はおこっ てしまっ

を走っていた。 その日ぼくは、 つものようにトラックを走っていた。とても調子よさそうで、 陸上部の練習を見学しにきていた。 とつぜん達也がバランスをくずして大きく転んでしまっ よさそうで、スピードをつけてカーブ達也を応えんするためにだ。達也は

仲間にだきかかえられてベンチに運ばれてきた。達也の足首 たみでゆがんでいる。 達也は、そのままその場所にうずくまってしまった。 が思わず声をあげた。 のあたりが赤くはれていた。ひどいねんざだった。かんとく 「あっ…!」 自分一人では立ち上がることができず、 顔は

「これはひどい。達也、 二週間 後 の大会は出ら な VI

ぼくには、達也の気持ちがいたいほどわかった。夢だったん それを聞いて、 れんぞ…」 ばってきたんだよね。なのに… だよね。ずっとずっと、 「ぼく、 絶対になおします。 達也の目にみるみる涙があふれてきた。 この大会に出ることをめざしてがん 絶対に出ます。 だって…」

達也の気持ちを思うと、 ぼくの目にも、 涙があふれてきた。

様子を見に行った。 日だ。ぼくは達也のことが気になり、 から二週間が過ぎた。 明日 は 1 よいよ大会 達也の家

ら言われていた。 陸上をしている大学生のぼく \mathcal{O}

がいいぞ。 どいようなら無理しないように言ってあげたほう 達也君、大丈夫なのか。 けがして、 「あのな、 あとからこうかいするかもしれないぞ。」 それに、無理し 今度はもっともっとひどくなるんだ。 お前の大切な友達なんだろ。 ねんざしていると痛くて走 て走ると、また同じところを 達也君の所に行って、 無理した ない V

だから、ぼくは心配で心配で、達也に会うなり、 達也はこう言った。 すぐにけがのことをたずねてみた。 す

ぎりのところだと思った。 でも…よく見ると、達也の足はまだ赤くはれていた。たぶん、明日は走れるかどうかぎり 「ほら、見てよ。 走れるさ。明日は絶対にがんばって走ろうと思うんだ。だって、 まだはれは残っているけれど、ずいぶんよくなっただろ。 夢の大会だもんな。」 大丈夫だよ。

(無理したら走れるかもしれない。 達也に今なんて声をかければいい しよう。 大会は明日…この大会は達也にとっては夢の大会なんだ。ぼくは、友達としてたら走れるかもしれない。でも、もし途中でけががひどくなってしまったらどう んだろう。 ぼくはなんて…)

そんなぼくをみて、 達也が話 しかけてきた。

「君が、今なにを考えていたのか、ぼくにはよくわかるよ。君は、ぼくがけが そして明日、このままぼ ずっと、ぼくのことばかり考えてくれていたんだろう。ぼくのことを考えて…考えて… いたんだろ。」 くを応えんするのか、それともやめなよって言うの をし かまよっ てか

ぼくは、 小さくうなずいた。

「だって、 君はぼくの友達だもの。 だからぼくは…」

50 れて、 自分で決めるよ。 君は、ぼくの友達だよ。」 かどうかは、明日の朝 「ありがとう。 でもね、君 本当にうれし うれ 心配しないで。無理はしなの朝の足の具合をみて、ぼ ぼくのことをこんなに思 いよ。 いよ。 ありがとう。 のさ、 大会に っっ くが でる 7 V か <

の目には涙がうかんでいた。 そうい 強くにぎりしめた。 って達也はぼくの手をにぎりしめた。 ぼくも、 のまにか 達也の手を < 0

 λ